

# 現今の大家 (二)

## 吉田博氏 犀水

緒言

數年以前、元の五號館に、慥か太平洋畫會の展覽會であつたと思ふ、予の記憶に一つの印象を留めた畫があつた。今は其印象も靡ろげで、圖取もハッキリとは覺えぬが、何でも夕霧の立ち單めた初冬か晩秋の郊外の景色であつたと思ふ。東京近郊の霧の夕に興を覺ゆること深き予が、そごろに自然のおもかげをしのび、其畫の前で佇立之れを久うした。畫題はすつかり忘れて了つたが、作者の名は吉田博とあつたのを確に記憶する、之が吉田博と云ふ畫家の名の予の腦裡に印せられた始である。其後予の境涯は幾變轉を経て、都門春秋の

畫室に於る吉田氏



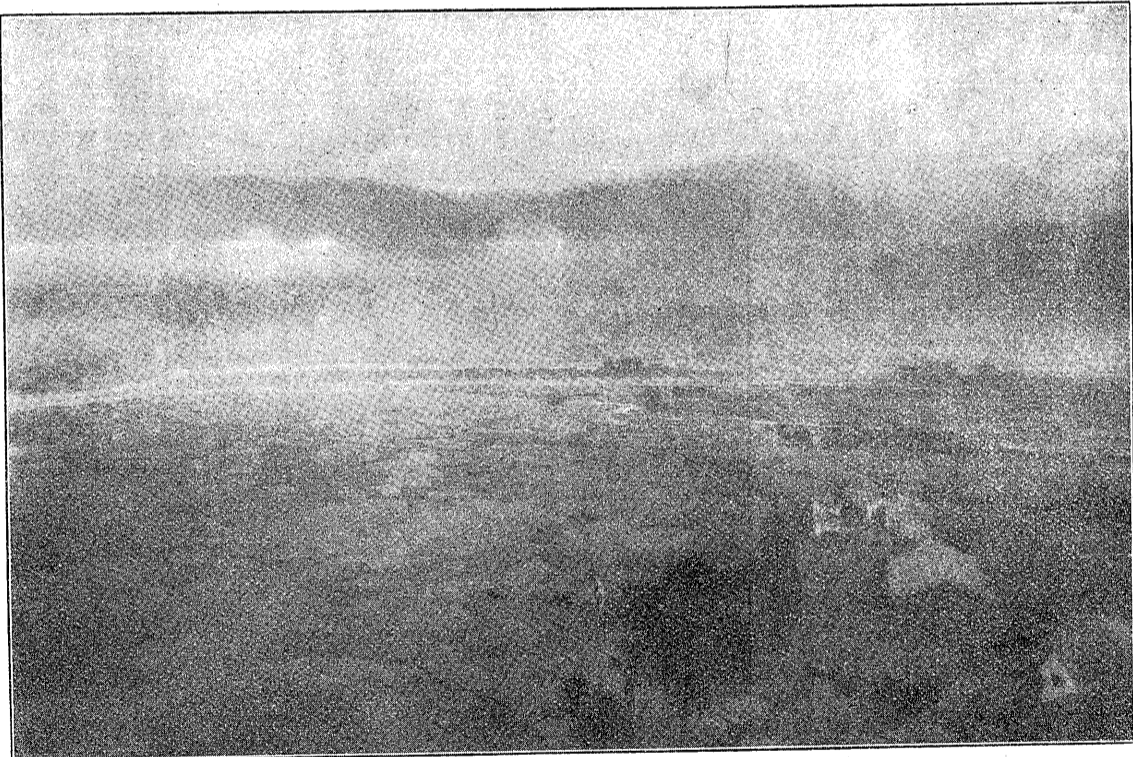
展覽會季節に背いたことも數次であつたが、何時か、同じ五號館の展覽會で洋行中の吉田氏の畫が數點陳列せられた中に、月影淡く照らせる寺堂の如き建物の圖と、月影鮮やかに流れて室に入るの圖とが、予の興を惹いたことがある、予が吉田氏の名と共に思ひ浮ぶ畫趣は、纖巧な、和らかみのある自然の現象を捉えんと心懸けつゝあるところの熱心なる態度を有するものであつた。今から顧ふと予が氏の繪に初めて注意したのは、多分氏が第一回洋行を終へて歸朝した頃の様である。

氏が第二回の洋行後、其色調は華やかに且つ強くなつた様に思ふ。洋行みやげの作品の夥しかつたことは、氏の勢力の旺盛なるを證するもので頗る世間を驚かした。技巧は數段の上達をなして、一昨々年の東京博覽會に「紐育ブルクリンの夕景」と「アルハンブラの景」とを出品して二等賞を得、一昨年文部省第一回美術展覽會に「ピラミッドの月夜」と「新月」(水彩畫)とを出して、後者は三等賞を受け、昨年の第二回展覽會に「溪谷」と「雨後の夕」(水彩畫)とを出品して、後者は二等賞の選に入り、今年第三回展覽會に「千古の雪」と「雲表」(水彩畫)とを出して、「千古の雪」は再び二等賞の選に入つた。斯くして氏の我畫界に於ける位置は略ぼ決せられた。固より氏は年尚ほ若かく、意氣も亦頗る盛んな人で、多望なる前途を有する畫家であるから、今後發展の極度は未知數であるが、我洋畫界の現状に於て、茲に新進大家の一人として氏を擧ぐるも、恐らく之を拒むものはあるまい。

加之氏の半生は堅忍勵精、立志傳中のもので、學ぶべきものが尠くない。

其略歴

吉田博氏は筑後國久留米藩士上田東氏の次男で、明治九年九月に生れた。四歳の時、廢藩後家計上の都合から一家を擧げて吉井と云ふ町へ移ること



『雨後の夕』吉田博氏筆 (入澤博士藏)

も幼より畫を好んで居たので、氏は自ら夙く畫を好むに至つたのださうである。中學では學課の出來は普通であつたが、畫學は其最も長ずる處であつた。當時中學の教師たりし吉田嘉三郎氏(元中津藩士)が、其畫才を見込んで、氏を其養子としたのを見て、早く畫に秀でたりしことが察せらるゝ、唯數學は其最も嫌ふところであつたが、負け嫌ひなる氏は兎も角人並にやつてのけたさうである。旅行癖は年と共に長じて、暇ある毎に郷里九州の山野を駆廻つて彦山や阿蘇や霧島などの高山に攀ち登つたことがあるさうな。十八歳の時京都に出た。それは養父が嘗て畫を學びたる田村宗立氏(洋畫の牽先者にして、今は日本畫家)の門に入らんが爲であつた。留まること一年間京都附近の寫生などをして居た。偶々三宅克己氏が寫生旅行をして京都に來たとき、其畫を示して東京に出てよと勧めたので、思ひ立つて東京に來たのが十九歳の時で、養父の先師たりし本多錦吉郎氏の指圖に従ふて小山正太郎氏の不同舎に入つた。當時不同舎には満谷、鹿子木、河合等の諸氏が居て、小山氏の不在のときなどは代つて後進を指導した。中川八郎氏などは稍遅れて同舎に入つた仲間ださうである。

其頃不同舎の組織では、夏冬は人物、春秋は景色と云ふ風になつて居たさうである。既にして氏は學資缺乏てふ難關に逢着して、月々三四圓の學費を以て支えざるを得ざるに至つた。其頃のことである、千駄木に三四人の同窓が一戸を借りて自炊生活を爲し、交代して炊事番に當つたが、何事に器用なる氏は最も飯焚の上手なりしと云ふ。かかる苦じき窮乏の時にも旅行の癖は止み難く、時々野宿的寫生旅行を試みた。又或時は中川氏と共に

# 吉田博

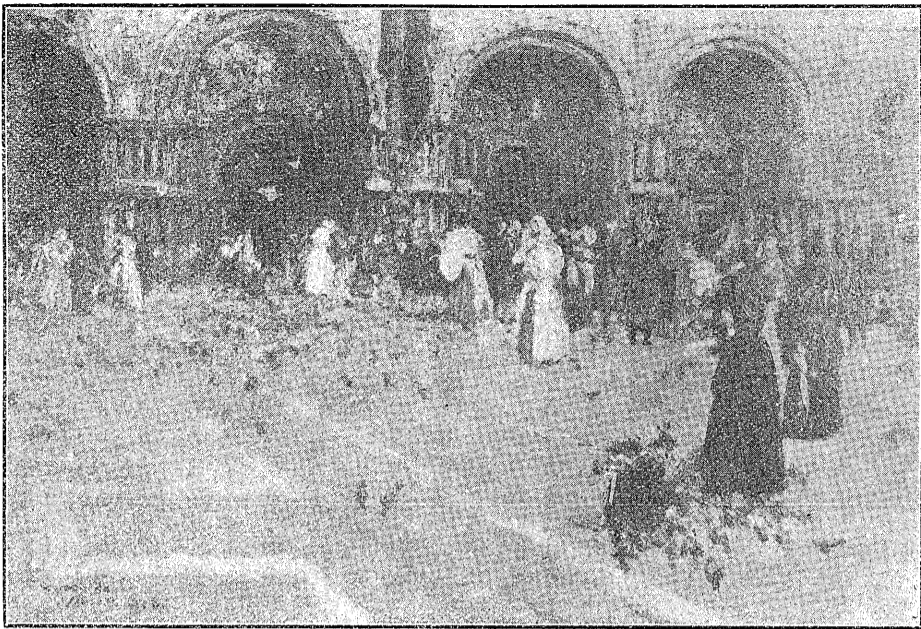
に人跡絶へたる日光赤城の山奥に十數日露宿して畫作に耽り、或時は丸山晚霞氏と共に淺間其他信濃飛驒の峻山高峰を跋渉したること數回であつた

さうである。其後或職業に就いたが、其職業は常に旅行を要するものであつたので、始終到る處にて寫生をしたさうである。氏が斯く常に旅行をして、自然に親しんで、之を師としたとは風景畫家として氏の技巧を練達するに大なる裨益となつたのであらう。

二回の海外漫遊

明治三十二年、海外遊學の志望益々切になつたので、中川八郎氏と相謀り、先づ旅費と渡米後一箇月間を支へ得るだけの資金を借り、又豫ねて外國人が好んで日本の水彩畫を購入するとの噂を聞いて居たので二人とも、自作の水彩畫を多く携帶するとし、東洋汽船會社の亞米利加丸に乗込んで、喜び勇んで横濱を解纜した。太平洋畫會派で冒險的私費洋行を企てたのは氏等が先者ださうである。桑港に著して直ちにデトロイトに往つた。それはサムライ商會の主人野村氏の紹介にて同地の

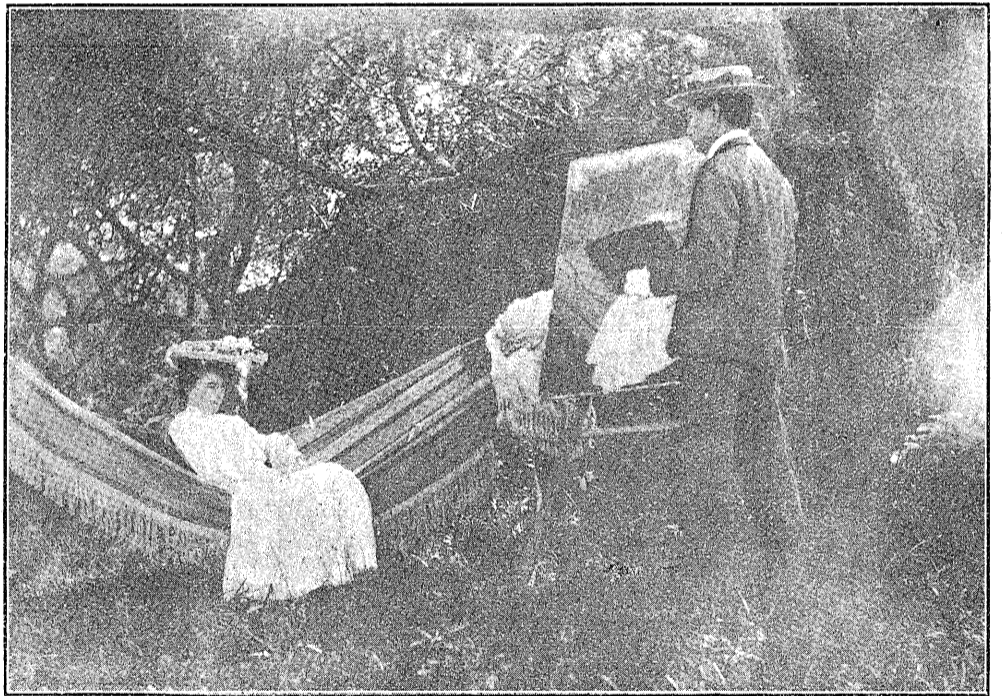
『ツェニコスのサンマルコ』吉田博筆



フリーヤ氏を訪はんが爲めであつた、フリーヤ氏は非常に日本の美術を愛好せる富豪の一人で、ウィスラー崇拜家の一人で、多く其畫を藏し、其他世界の名品を蒐集し、又頗る漫遊を好み、曾て我日本にも來遊したことがある。氏等が往訪した時は恰も旅行中にて不在、空しく二週間ばかりを待たねばならぬこととなつたので、一日同市の地圖を買求めて美術館の所在を調べて參觀した。其時携へて居た氏等の畫を館長が見て、面白いと賞讃し、展覽會を開くから一箇月間滞在せよ、費用は一切氏等に負擔はさせぬからと勧めた。實は一箇月滞在すれば、囊底全く空しくなる譯であつたのだが、兎も角勧めらるゝままに滞留を承諾した。幸に之が

氏等の運命を開く鍵となつた。展覽會中に畫が大分賣れて収入のあつたのと斯う云ふ工合にすれば畫が賣れると云ふことも分つたので

出發前にはボーイでも硝子拭でも何でも勞働苦役を厭はずやつて往かうと云ふ決心であつたのが、今はそんな無駄骨折はせんでもよい、畫を賣つて往けば立派にやつてゆかれる。小さく／＼やつて往くよりも大きく／＼やつて往く方が成功すると云ふ秘訣を悟つた。それで其方法を以てポストンに行き、華盛頓に行き遂に歐洲に渡航するの資をも得て、先づ英國に到り、次で巴里に着したのは丁度一九〇〇年萬國博覽會の開かれた時で、博覽會には其前氏の出品して置た『高山流水』も陳列されて居た。

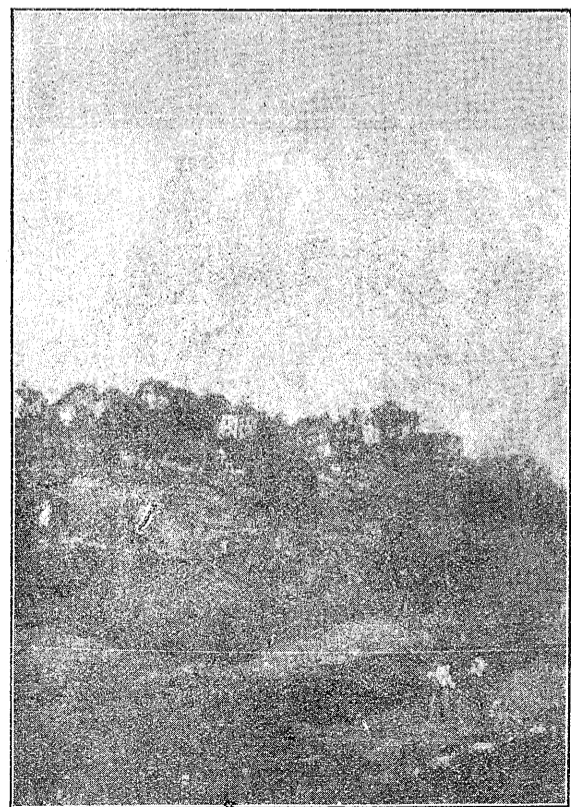


北米ログマスに於て寫生の中生田吉氏

『高山流水』は氏の大作の一作で、三十一年か二年頃の作である。横凡そ九尺位、豎凡そ四尺五寸乃至五尺位あつた。其畫に就ては面白い話がある。其頃氏は千駄木に住んで居た。畫が出来たが、室が小さくて適當の距離を隔てて見ることが出来ぬ、そこで其畫を六疊敷の室の天井に張つて、之を見るには皆仰臥して眺めたさうで、今でも友人間の一つ話になつて居る、此畫を作るに就ては、最も場所の選擇に苦心した。凡そ半年間も信濃飛驒の深山幽谷を探り巡つても、理想に適ふた處がなく、遂に小諸附近から長野方面を見渡した廣い景色を描くことに決定した。頗る雄大な構圖で、當時の我國の洋畫界に於ては、實に大膽な試みであつた。其時分は孰れも景色の一小部分を取つて畫く風があつて、そんな大きな景色を畫いたものはなかつたのである。畫成るや尠からず我畫界を驚かした。其畫は萬國博覽會で褒狀を獲た、佛蘭西人の間には「日本人にして能くもあれ程雄大な景色を纏めた」との評もあつたさうである。

『瑞西のウエテホルン』

吉田博筆



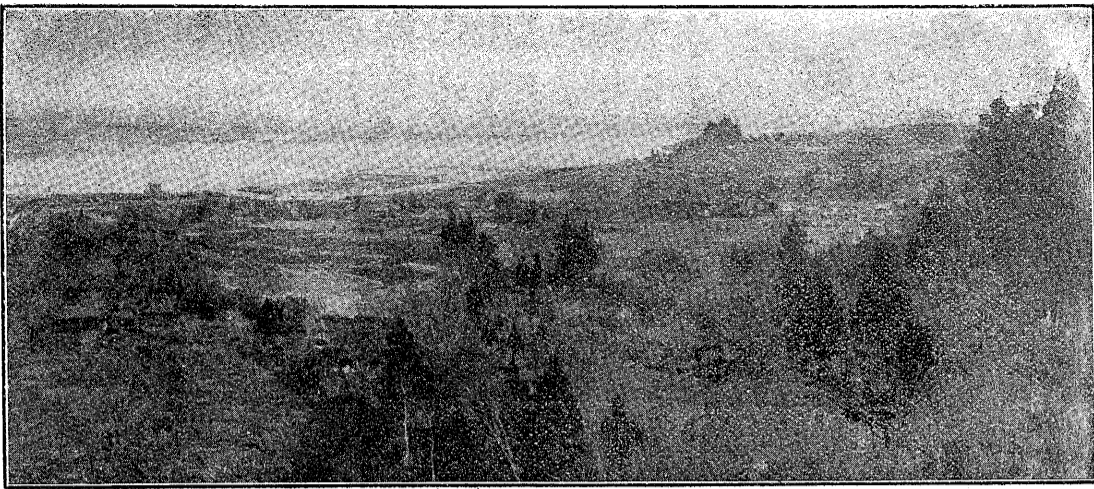
それから獨逸、瑞西、伊太利等を歴遊した。伊太利に行く途次で、本國の友人より瀟谷、河合、鹿子木、丸山四氏の渡米すると云ふ報知に接し、米國に戻りて四氏に會合し、四氏は歐洲に、氏等は本國に歸つた。それは三十四年である。二年の後、氏は再遊の企を爲し、義妹ふじを女史（養父嘉三郎氏の次女で、今は氏の夫人である）を伴ふて三十六年十二月二十八日に横濱を出帆した。氏は漫遊の目的を説明して『前のは彼の地の美術家が、今何をなすかあるかと云ふ事を觀察したかつたのと、も一つは彼等の遺した仕事に親しく接したいと云ふ願望で、彼の美術製作を觀て之を智識の上に學ぼうとしたので、今度は自己の畫家たる手腕を實際に養ふ爲めに山川風土のさま／＼を寫生して歩かうと云ふ目的であつた』と云ふ。

シヤトルに上陸し、直にポストンに赴き、紐育フィラデルフィヤ、華盛頓、ピッツバーク、チカゴ、セントルイなど、東部諸州の都々を経廻り、到處る自作展覽會を開いて畫を賣つて漫遊の費を作つた。其セントルイには世界博覽會があつて、氏の『雨後の櫻』と『蓮池の夕月』が陳列されて三等賞を得た。二年間の滞留に渡歐の費用と準備とを整へ、又都市に至る所に畫趣を探りて畫囊を肥やした。かくて歐洲に渡り英吉利、佛蘭西、獨逸、和蘭、瑞西、伊太利、西班牙諸國を巡遊し、亞弗利加に入りてモロッコ及埃及を旅行し、隨處に寫生を爲して三十九

年の二月歸朝した。各地各様の風光景象は氏の畫想詩思を涵養するに多大なる感化を與へたるべきは辯を俟たぬ。

氏の自信

記者嘗て氏に向つて外遊の所得如何と、歐米古今の大家中、氏に多少の感化を與へたるものありや否やとを問ふ、氏は答へて曰ふ『外國では一人も自分の仕事に近い仕事をして居るものを見なかつた。自分は何處までも自分の特色を發揮しなかつてはいかぬと思つた。外遊以前には小山、川村、黒田、久米などの諸氏が歐洲から歸る度毎に、我國の畫風が動搖し、變遷した。自分も世の風潮に連れて幾分か迷つたことがないではないが、自分で親しく歐米の畫壇を見て來てからは、他人の技風の如何に拘らず、自分は飽くまで、自分の技風を、自家の本領を發揮せねばならぬと云ふ確信



多摩川の遠望 吉田博筆

を得た』云々

氏は自信の強い人である。決して其所信を枉げない。而して畫家は自己の見識を持つべきものたることを主張して居る。氏が第二次洋行土産の著書『寫生旅行』の中に、ウイッスラーの『テンオクロック』の一部分を譯した次に

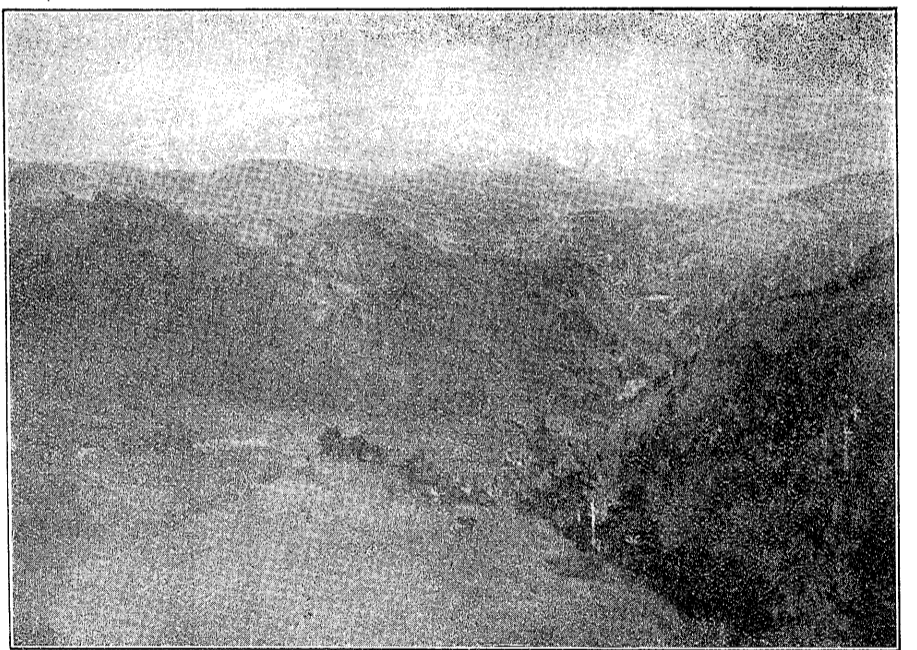
『斯る主張に依つて察するにホヰッスラーは誰が何と云はうが、一切頓着なく、異常なる自己の見識に頼つて、まるで世間を踏み付けにして居たと云ふ事がわかる、其行爲の批判は兎も角として、美術家は之だけの見識を持つべきである。或は彼れと反對の見識でも彼れと同じ強さに於て保持しなけれ

ばならぬ。ホヰッスラーは自然を譽に敷いてしまつて居る。けれども私は自然を崇拜する側に立ちたい。So.....』と云つて居るのを見ても、略ぼ推察が出来る。

其趣味と畫題

氏の趣味は甚だ廣い、其本領とするところは風景畫であるが、自ら範疇を定め、城廓を築いて、其中に閉ぢ籠るのは陋なりと信じて居る様である。氏は曰ふ『一時は山や水や岩などを盛んにやつた、外國に行く頃から平原の景色などもやつた。人物の裸體は學校の誓古時代にやつたし、動物なども時々畫く、此頃又山などをやつて居るが、當分いろんなものをやつて見様と思ふ』と、又『由來日本人の癖として、何か眼先の綺麗な、而して一種風景と云ふ型の中にきちん入るものでなければ景色をなさぬもの』と考へる、私は稍々風變りで、平凡なところでもごちやついた市街でも何でも彼でも面白い甘味のあるものを見る流儀だから、煤煙に充ちた工場町にも繪具箱を肩にして出掛ける云々と。

まこと氏の選ぶ畫題は、頗る多方面に涉つて居る。風景——風景に於ても多様の題を選ぶ——は最も多いが、其他建築あり、街景あり、人物、動物あり、遂に裝飾畫をも試みつつある。併し其趣味の中心は深山、幽谷、平原等にある様である。人物と動物を組み合せた一種の理想畫風なる彼の『精華』を見るに總ての點に於て決して成功したるものではない。裝飾畫及日本の建築裝飾に關して氏は獨特



峰の眺め 吉田博筆

の意見を有して居る、予は氏自身からも聞き、又『寫生旅行』でも讀んだ、中々面白いが、實地の應用に就ては未だ之を論ずべき時機でないと思ふから、今は省略する。

其構圖と色調

氏の趣味の多方面なものと、其畫題の多様なに伴ふて、其構圖も亦多様である、茲に掲げたる『サシマルコノ景』の如きは一見平凡なるが如くにして實は中々興味ある構圖である。

山水畫の構圖に於て氏の好んで用ゐる構圖の二様を代表するものは『雨後の夕』と『千古の雪』である。『雨後の夕』は廣い眺を一望の中に收める横長の圖で、今年の太平洋畫會展覽會に出た『多摩川の遠望』又は往年の『高山流水』など同一の式に屬し、『千古の雪』は高山の絶嶺の一部を仕切つた圖取で、其稍々變化したのが『雪表』『峰のながめ』『ウエテホルン』などである。前者は廣濶な感じを得るが、後者は動もすれば窮屈に陥つて高遠な感じ

を失はんとすることがある。

色調に於ても前記の二者は、各氏の特徴の一方づつを代表して居る。『雨後の夕』は和かみのある、そして自然の情致を捉へ得たものである。『千古の雪』は色調強く、重々しいところがあつて、そして深山幽谷の感じも出て居るが、何處かに人工的の感があつて、色調も濃厚に失ひ自然の情致の幾分を妨げる様に覺え、『雪表』の如きは、華やか過ぎる様に思ふ。序に注意したいことは、氏は極めて深山幽谷を跋渉することを好むが故に、或は觀光の紀念として、又は冒險的旅行の紀念としての興味、畫其物の藝術的興味よりも、氏自身に取つてより大なる價值を覺えしめることがありはじないか。『千古の雪』も佳作ではあるが、予は『雨後の夕』を一段上に置きたいと思ふ。

河合新藏氏の評

予は氏の親友の評を聞くべく、先づ河合氏を訪ふた。そして其説が頗る予の所見に近く、且つ氏の畫歴等に關しては最も信憑すべきを思ふが故に茲に摘記して此評傳を結ぶこととする。

『吉田君は元から元氣旺盛な人で他の企て得ざることを敢てするの風がある、人跡の絶へた深山幽谷などに分け入つて野宿をして畫を描いたり、寒氣凜然たる雪の日に寫生に出懸けると云ふ様なことをする、また勢力の強きこと異常で、製作の多いことは同人等の敬服するところである。』

『洋行前の畫は平板で、日本畫の様に薄つべらで、自分でも苦んで居たが、歸來其點に非常に注意し、奥行のある厚みのあるものになつた。』

『第一回の洋行から歸つた頃は、色調に和らかみが出た、それは多分紐育の風景畫家トライオンの畫風に私淑したのだらうと思ふ。』

『構圖は洋行前には、或型式に囚はれて居たのが、歸來自由になつて、變化が多くなつた。』

『色彩も豊富になり、調子も強くなり、隨て繪にも深みが出来て重々しくなつた。』

『第二回の洋行中の繪は色彩がケバ／＼しくなつて居たが、今は落付いて來た。是が吉田君の本領であらう。』

『其長所は春の芽ばえの和らかな感じとか、雨後の朝とか、夕とか云ふ様な、自然の或る特殊なる現象の和らかな感じを捉へることにある様に思ふ。』